

人人悉く道器なり

傳光録

昔、インドに脇尊者きょうそんじやと呼ばれる僧がいました。

この尊者は、伝説によりますと、生まれる前に母の胎内に六十年、生まれてから八十年の計百四十歳で出家を志し、師の伏駄密多尊者ふだみったに参じたということです。

周囲の人々は、そんな老人になつてから出家しても修行に耐えることはできないであろうからと、断念することを勧めました。

しかし、尊者は意を決し、昼はお経を唱え、夜は坐禅をしてひとときも師の脇を離れず修行しました。そのために脇尊者と呼ばれたそうです。ついに、三年間の精進の末、悟りを開き、お釈迦様から数えて十代目の法を嗣ついでいだといわれています。

冒頭の句は、その脇尊者の故事に因よんだ瑩山けいざん禅師のお言葉です。禅師は脇尊者の故事を例にして、人々は誰でもことごとく道を得ることができる器を備えていることを説かれています。ここでいうところの道器とは、人が人として進むべき道（仏道）の器のことです。その道器が開花するのに、人や時期を選びません。

「思おもいたつたが吉日」ということばがありますが、気がついたとき、強く心に決めたとき（発心ほっしん）が最善の時である訳です。

それでは、焦らなくてもいつでもいいようにも思えますが、この言葉の奥では、日々刻々が「道器」としての大切な一瞬であるので、毎日の生活を漫然と過あごすのではなく、脇尊者のように、心身を惜しまずに精進努力するべきであることも同時に私達に教えてくれています。



曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所
第五教区 布教部・出版部

この言葉は瑩山禅師の主著である、『伝光録』第十章「脇尊者(婆栗湿縛尊者)」の提唱の部分で述べられた言葉です。『伝光録』は、お釈迦様から続く歴代の祖師の悟りの因縁を述べ、それに対して瑩山禅師がそれぞれに提唱(コメント)を付した書物です。いわば曹洞宗の教えの由来を示す書と言えましょう。

我々は、「この書を通してインド以来の祖師がどのように修行し悟りを開かれたのか、またそれに対する瑩山禅師の考え方や教えを学んでいるのです。

前掲の言葉に続いて「日日是れ好日なり」とあります。つまり、人は皆素晴らしいものを持ち、良い機会に毎日巡り会っているのだ、と示されているのです。

そして、瑩山禅師はそれに気が付かないか、もしくははその好機を生かすことが出来ない人々を叱咤しているのです。